

森の環境レスキュー隊Ⅱ

■ 事業のねらい

シカなどの野生動物の個体調査をとおして、自分たちの住む身近な自然や環境問題に対する興味関心を高め、野生動物の生態と自然環境のかかわりについて知る。



- 実施日 平成23年10月22日(土)～23日(日) 1泊2日
- 参加対象 小学校1～6年生 15名
- 参加実績 参加者：14名
 小1＝1名、小3＝7名、小4＝2名、小5＝2名
 小6＝2名
 男子＝6名、女子＝8名
 運営協力者：高校生2名
- 備考 活動場所：足寄町(九州大学農学部附属演習林北海道演習林)
 共 催：九州大学農学部附属演習林北海道演習林

1 事業実施の背景



本道は、周囲を海に囲まれ、多くの山々や広大な天然の森林の中に、ヒグマやタンチョウ等多様な野生動物が生息するなど、四季の変化に富んだ豊かな自然環境に恵まれている。この自然環境は我々の生活に恵みや潤い、安らぎを与えてくれる貴重な財産となっていると同時に、近年、増えすぎたエゾシカによる農業・森林被害の拡大、酸性雨、森林の減少、野生動物の種の減少などの環境問題が深刻さを増し、その多くは我々の日常生活や事業活動に起因すると言われている。

そのような中で、子どもたち自身がフィールドに出て自ら体験し、感じ、わかるというプロセスを踏むことにより、自然に対する知識や理解を深め、環境について考えることができるよう、また地域の自然環境の中で驚きや感動などの「五感で感じる素晴らしさ」を体験することで、自然への興味関心を高めることを目的として実施するものである。

2 プログラムデザイン

					16	17	18	19	20	21	22	
	23											
10/22 (土)	受付 16:00～16:30				受 付	出 会 い の つ ど い	夕 食	移 動 ・ 準 備	スポットライトセンサス 九大北海道演習林 エゾシカ、夜行性動物 の調査、調査のまとめ	星 空 観 察 会	就 寝 準 備	就 寝
10/23 (日)	7	8	9	10	解散 10:00							
	起 床	洗 面 の 探 清 掃	朝 食	準 備 ・ 移 動	別 れ の つ ど い							

■ アクティビティについて



■ 意図

- 野生動物の個体調査を行うことで、野生動物や自然環境への興味・関心・意識を高め、自分たちの住む地域と野生動物のかかわりについて気付く。
- 夜間の調査、山小屋宿泊といった非日常の活動を行うことで、地域の自然や自分たちの日常生活について新たな発見や気付きを得る。

■ 留意事項

- 調査地点は歩行上危険箇所も多く、また夜間であり寒さの問題もあるため、複数回の事前の実地踏査を含め、九州大学の職員と綿密な行動計画を作成した。
- 事業趣旨を達成するため、スポットライトセンサス(夜道をスポットライトで照らしながら動物などを探す)の前後で九州大学職員による説明を行うことにより、参加者の活動意欲と意識を高め、また、単なる体験だけで終わらずに、学習のまとめも含めたアクティビティとし、連続性を持たせた。

3 活動の様子



■ 当日の様子

はじめに、九州大学北海道演習林 久米 篤林長からスポットライトセンサスの方法、実施理由、演習林の様子などについて説明を受け、これから取り組む調査の事前学習を行った。演習林内に生息するヒグマやシカなどの映像が映ると、食い入るようにして見つめ、参加者たちは活動への期待を高めていた。

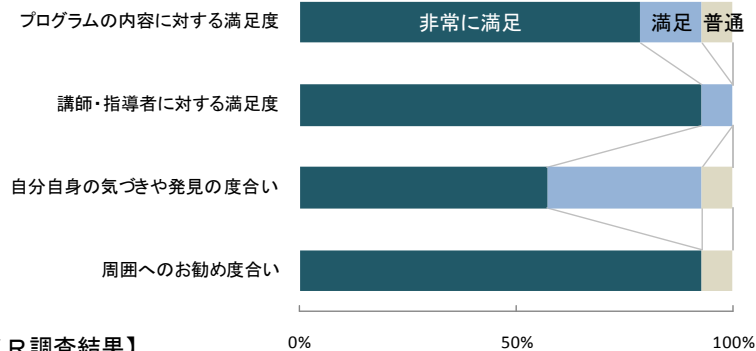
この日はあいにくの雨だったが、拓北地区の調査場所でゆっくりと走る車の中かからサーチライトを照らしてシカなどの野生動物を探した。野生動物の目にライトが当たるとよく反射し、多少の藪や距離があっても識別することができるため、何か反射するたびに「いたー！！」と大きな声を上げて「シカだ！」「うさぎがいた！」と動物を見つけていった。

約3kmにわたる調査活動のあとは、演習林内にある山小屋に宿泊体験。薪ストーブやペレットストーブで暖をとりながら皆で談笑し、山小屋の中で寝袋にくるまって眠るという日常ではできない体験をした。

翌朝は、早起きして森の探検をしてわき水を発見。木や土にろ過されたわき水を見て、「あったあった」と歓声がおこった。「今まで一番おいしい水だった」「家に持って帰りたい」などの声が聞かれ、森の恵みを堪能していた。

■ 参加者の声

- 雨の中でも動物を見つけることができました。夜の森は暗くてこわかったけど、みんなで探して楽しかった。(小5女子)
- 夜の森でライトを当てると動物の目が光ってびっくりした。うさぎやきつねを見つけることができました。(小3女子)
- うさぎに会えてうれしかった。目が光っていた。(小1男子)
- シカの雄は角で年がわかるのには驚いた。もっと色々な動物を見つけたかった。また山小屋に泊まりたい。(小5男子)



4 事業評価

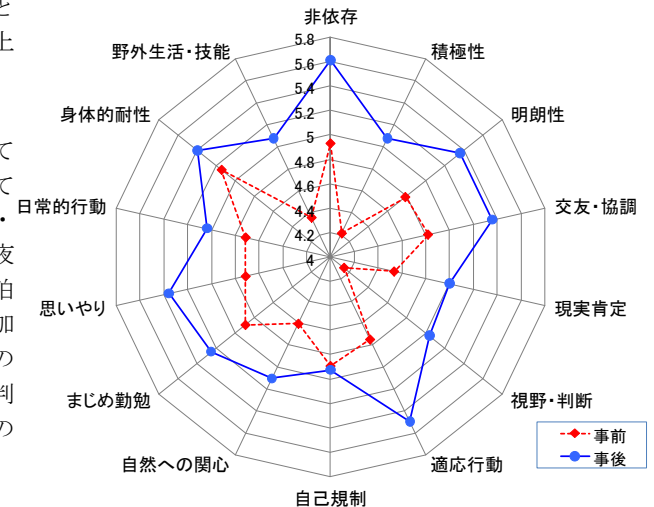


■ 参加者の変容【I K R調査結果】

野生動物と自然環境への興味関心を高め、自然と動物、自分たちの生活がどうかかわりあっているのかに気付き、意識を高めることに重点を置いた。また、実際と同じ方法で行った調査活動や九州大学職員による説明等も参加者の意欲を高め、自ら進んで判断・行動すること、仲間と協力することにつながった。結果として期待していたとおりの向上がみられた。

■ 結果の分析・考察

積極性と視野・判断について一番大きな伸びがあり、続いて適応行動、非依存、野外生活・技能などで向上がみられた。夜間の調査体験活動や山小屋宿泊などの非日常の体験活動が参加者の意欲を高め、悪天候や山の中の不便さも、自立心や自ら判断して行動する力を付けたものと考えられる。



5 まとめ



■ 成果

- 九州大学と少年自然の家の連携により、「雨だからできた」「夜だからできた」活動となり、天候に左右されない弾力的な運営による意義深いプログラムとすることができた。
- 九州大学の事前説明により、参加者の事業趣旨の理解が深まり、意欲も最後まで持続した。
- 座学で学ぶ部分と野外で体験する部分があったことにより、自然や野生動物への理解度も深められた。

■ 課題・今後の方向性

- 大学との協力・連携を継続しつつ、今後は大学・道の林務部・町・施設といった広域での連携事業も考えられる。
- 夜型の事業を実施する場合はリスクも高まるので、事前準備や度重なる実地調査、また協力先との連携を密にして行動計画を策定する必要がある。
- ボランティアリーダーの資質向上を図るため、リーダーに任せられるところは任せると、今後もリーダーの資質に合わせた指導・助言をしていくことが必要である。